
たえて言葉のなかりせば

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たえて言葉のなかりせば

【Nコード】

N2832C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

よのなかに、もしも言葉がなかったら、ひとはもつとしあわせになれる——普段からそんなことを考えている、口のきけない少女と、そのやさしい兄の物語。

よのなかに、もしも言葉がなかったら、ひとはもつとしあわせになれる。私はいつも、そんなことを考えている。

私は今日、失恋した。

わかれの言葉はひとことだった。携帯電話ごしの「サヨナラ」。
それだけ。

中二のときからもう三年もつきあった。それなのに、じかに会ってもくれなかった。

わかれの理由は、私がいちばんよくわかっている。私が、口がきけないからだ。

私はうまれつき、声がでない。

彼は私が告白したとき、それでもいいよと笑ってくれた。笑うと目がなくなってしまう彼の顔を、私は今でもよくおぼえている。

どうしてもやりきれなくて、私は今、公園のぶらんこに揺られている。

傷心のおとめは、夜の公園で、月のひかりをあびながらぶらんこに座っているのがふさわしい。私には、そんな思いこみがある。

夜空はとてもきれいだっただ。まあるく肥えふとった月が、しずかに私を見下ろしていた。

星はちかちかまたたいて、私に涙をながさせる。

こんなとき、声をあげて泣けたらどんなにかいいだろう。けれど私は声ひとつもらさず、陰気に泣くことしかできないのだ。

好きだった。とてもとても好きだった。それなのに彼は、私を捨ててゆくと言う。口もきけない女はいらないのだと言う。

だから、私は思う。

よのなかに、もしも言葉がなかったら——と。
私はため息をついた。

どうして神さまは、私に言葉をあたえてくださらなかったんだろ

う。

「――ひなこ」

そのとき、長い影が私にかぶさってきた。おにいちゃんが私の前にたっていた。

私は、しぼんだ気持ちがまたふくらんでゆくを感じた。

おにいちゃんは白くてほそくて背がたかい。とてもきれいな人なのだ。見るものを清冽な気分させるおにいちゃんが、私は大好きだった。

「帰りがおそいから心配してたんだよ。はやく帰ろう」

めがねの奥の気弱そうな両目が、私をまっすぐ見つめている。おにいちゃんのさしだした手につかまって、私は立ちあがった。

おにいちゃんのほかは誰も心配なんかしてくれていないということとを、私は知っていたけれど、おにいちゃんと手をつないで、ふたり肩をならべて家に帰った。

肩をならべて、といっても、私はおにいちゃんの肩ほどまでしか身長がなかったのだけれど。

家に戻った私を待っていたのは、みごとな無関心だった。

おかあさんは私を見ようとさえしない。おとうさんは私を一瞥しただけで、すぐに焼き魚の身をほぐすのに戻る。

私は厄介ものなのだ。両親は私をいまいましく思っているにちがいない。

おにいちゃんのひいてくれたいすに、私はちよこんと腰かけた。私のとなりの席にはおにいちゃんが座る。私たちは、なにも言わずに食事を始める。

会話は無い。おにいちゃんのもとと無口だし、両親は私をきらっている。食卓はいつも不気味でしずかだ。

食器同士がぶつかりあう音、それだけがひびく。

部屋で本をよんでいると、ノックの音が聞こえた。私は机をけとばした。声のでない私の返事は、一回ならしたらイエス、二回ならしたらノーという、きわめて簡単なものなのだ。

ドアがあいた。おにいちやんがはいってきた。

どうやら、私と話したいことがあるらしい。

「今日、なにかあったの？」

やさしくおにいちやんが言った。

私はホワイトボードをだして、マーカーで文字を書きつける。

ふられたの

一字ずつゆつくりと書いた。だんだん悲しくなってきた、うつむいた。

目許がじんわり熱くなって、なにかが目の奥からにじみでてくる。ぱとん、と落ちる。

なみだ。

とまらない。

たぶん、好きなのだ。まだ。

あきらめられないのだ。

しつこい女だと、自分でも思う。しめっぽくて、いやな女。

でも、他人になんて思われたってかまわないくらい、私は彼が好きだった。今も好きだ。たぶん。

すきだったの

とてもとてもすきだったの

ほかにはなにもいらなくらい

ほんとうに

ほんとにすぎだったの

私は乱暴に書きつける。視界がゆがんでいて、文字がにじんで見えた。

どうしてひとは、一度好きになったひとをずっと好きでいられないんだろう。

もしそうなら、ひとはもつとずっと、しあわせになれるに違いのないのに。

「ごめん……。ごめん、ひなこ。もう泣かないで」

おにいちゃんのぬくもりが、私をつつんだ。私はおにいちゃんのシャツに顔をうずめて、なみだを吸いとらせた。

子どもをあやすみたいに、おにいちゃんの手が私の背中をたたいている。

しばらくすると、なみだは収まってきた。

おにいちゃんが、あたかくてやさしいから。だから、なみだは退却してゆく。

私は顔をあげた。おにいちゃんと目があつた。

おにいちゃんはやさしい、でもつらそうな顔をしていた。たいせつなものがすぐ目の前にあるのに、透明なガラスがさえぎっているせいで手の届かないときのような、そんな顔。

どうしたの？

私はそでで顔をぬぐってから、ボードに書いた。

「——なんでもないよ」

そう答えるおにいちゃんの顔は、たしかになんでもなさそうだった。あの不思議な表情は、すっかりなりをひそめていた。

「それよりひなこ、大丈夫？」

私はおにいちゃんの胸を一度、たたいた。

夜中にふと、目がさめた。時計を見ると二時だった。草木もねむる、丑三つ刻。

とてもしずかな夜だった。だからなんとなく、闇がこわかった。ひたひたと迫ってきた闇が、誰にも気づかれないうちに私をのみこんでしまっんじゃないか——そんな気がしてならなかった。

私はベッドからおりて、窓のそばまであるいた。このあおいカーテンの向こうには、ベランダがある。

カーテンをひいて、窓をあけた。つめたい空気がながれこんできた。

夜空はすくなくとも、闇、ではなかった。
月。星。街のあかり。

そのおかげで、空はあかるかった。闇はひかえめにくすんでいた。裸足のまま、ベランダにでた。足のうらがひんやりした。

風がふいてきて、私の髪をやさしくなでた。髪が顔にかかってくすぐったい。首を振ってはらった。

となりのベランダ——おにいちゃんの部屋のベランダに、おにいちゃんがいるのが目にはいった。

おにいちゃんは私に気づいていないようだった。月を見上げて泣いていた。

白いほおに透明ななみだがひとすじ、伝っていた。

まるで彫像みたいに、おにいちゃんは動かなかった。ただじっと、月を見ていた。

——見ているのは、いけない。

そんな気がして、私は部屋に戻ろうとした。

窓に手をかける。まちがえて、こすってしまう。小さな音が、いやに大きくひびいた。

私は口許に手をやった。

おにいちゃんに、気づかれてしまった。おにいちゃんは私を見て

いた。

なみだをぬぐおうともせず。

「ひなこ……」

呆然と、おにいちやんがつぶやいた。

ときが停まってしまったかのように、私達は見つめあっていた。どれだけそうしていただろう。先におにいちやんが正気にかえった。

「どうしたの、ひなこ」

私はおにいちやんに、待っていて、と手でしめし、部屋の中に戻った。

ホワイトボードとマーカーを持って、すぐにベランダへでる。

おにいちやんは、待っていてくれた。

ねむれなかったの

おにいちやんこそどうしたの

ボードを胸の前にかかげた。おにいちやんは考えこむように小首をかしげる。

「ねむれなかったんだよ」

しばらくして言ったおにいちやんに、

うそ

と書いたボードを見せる。

うそ。

おにいちやんはうそをつくとき、いつも、同じしぐさをする。小首をかしげて考えこむのは、おにいちやんがうそを考えているときのしぐさなのだ。

わかりやすいうそはつかないでと、私はいつも書くのだけれど、おにいちやんが私にわからないうそをついたためしはない。

もちろん、わからないうそをついていた場合、おにいちゃんがそうと言わないかぎり、私に知れるはずがないのだけれど。

もしもうそをつくのなら、一生だましてほしいのに。

おにいちゃんはおとめ心がわかっていない。

「——そうだね。うそ、だ」

おにいちゃんはすぐに認めた。

とてもつらそうな、そうとても哀しそうな顔で。

どうしてうそなんかつくの

そんな顔をするくらいなら、はじめからうそなんてつかなければいいのに。

「言ったらひなこは軽蔑するよ」

私は首をふる。

どうして、おにいちゃんを軽蔑できるだろう。

「……そろそろ、潮時かもしれない……もう、だめだから……」

おにいちゃんは肩をふるわせた。片手でめがねを乱暴にはずして、目許を手でおおう。

私は目をそらした。見てはいけない気がした。

「——好きなんだ。ひなこのことが」

聞こえるか聞こえないかの大きさの声で、おにいちゃんが言った。私は顔をあげる。

そんなの、前からわかっていた。私もおにいちゃんのことが好きだ。

今さら、どうしてそんなことを言っただろう。

「違うんだよ」

私の思っていることを察したらしく、おにいちゃんが顔をゆがめた。

とても奇妙な言いかただけけれど、おにいちゃんのゆがんだ顔はきれいだっただ。

切羽つまったとき、ほんとうにどうしようもないときなどにひとが見せる表情は、すべからくうつつくしいと思う。今のおにいちゃんの顔がまさしくそれだった。

「ひなこの好きとは違うんだ。ひなことは、他人にうまれたかった」それを聞いて、私は理解した。

おにいちゃんは、私が好きなのだ。肉親としてでなく。どうしよう。

困ってしまう。今まで一度も、そんなことを考えたことはなかった。

おにいちゃんはおにいちゃんだ。

それ以上でも、それ以下でもない。

きつと、私とおにいちゃんの間にある気持ちのずれは、このベランダとあのベランダの間のすきまのようなものだと思う。

別に、たいした差ではない。でも、まちがいなく、ふたつの間にはうめられないみぞがあるのだ。

私はなにも言わないで、部屋にとってかえした。

窓をしめてクレセント錠をかけて、カーテンをひいた。ついでに、とびつくようにして、部屋のドアのかぎもかけた。

どうしよう。

こわい。

ふとんをかぶって、いろいろなことを考えた。

おにいちゃんのことや、好きだった彼のことだ。

どうして恋は、思うとおりにならないんだろう。

おにいちゃんは、私が好きで。

私は、彼が好きで。

彼は、別の女のひとが好きで。

とても不毛だ。むくわれるのは彼だけだから。私もおにいちゃん

も、別のひとを想う相手を想っている。

私とおにいちゃんが他人で、おにいちゃんのことを私が好きになれたら、どんなにかしあわせなことだろう。

でもそれは、むりなのだ。

私とおにいちゃんとは、もう兄妹に生まれついてしまっている。

私はもう、彼を好きになってしまっている。

次の日、私は学校をさぼった。

セーラー服を着て、おにいちゃんと顔をあわせないですむように、朝はやく家をでた。そして、学校ではないところへ行った。

行った先は、町中のアーケード街。

まだどの店もあいていなくて、そこはひっそりとしていた。シャッターのおりた店はあさびしげだった。

こんなにはよい時間には、さすがにストリートミュージシャンも演奏していない。今から演奏をはじめようとしているらしい、ギターやハモニカを用意しようとしているひとたちはたくさんいた。

目的もなくあるいていると、もう演奏をはじめているひとを見つけた。

そのひとは、こざっぱりとした格好をしていた。ストリートミュージシャンより、どこかの高校の生徒会長をしているほうがにっこりだ。

そのひとが歌っているのは、哀しいうただった。

好きなひとが、自分を捨ててとくへ行ってしまふ。いったいなにが不満なのか。やはり女のほうがいいと言うのか――

そんな、うただった。英語だったから、くわしいところはわからない。でもきつとこれでいいんだと思う。

そのひとはたったひとり、ダンボールに座って、ギターをひきながら歌っていた。

私はそのひとの前にしゃがみこんで、じつと、うたに耳をかたむけた。

瞼をおろすと、うらがわが熱くなってきた。

うたのとおりのお話が、瞼のうらがわに見えた。

そばかすだらけの赤毛の少年が、金髪の青年に恋をする。ふたりの心は通じあつて、しばらくはしあわせに暮らすのだけれど、青年は急にいなくなってしまうのだ。残された手紙には、たったひとこと、farewellの文字。なんの説明もないのに、少年は青年が、ほかの女のひとのもとへ行ってしまったのを知る――

どうしてひとは、一度好きになったひとをずっと好きでいられないんだろう。

どうしてひとは、好きになってはいけないひとを好きになってしまふんだろう。

けっきょく一日中ウィンドウショッピングを楽しんで、家に帰ったのは夕方だった。

家にはあかりがついていなかった。ドアにもかぎがかかっていた。仕方なく、サイフからかぎをだして、自分であけて中にはいる。

この時間、誰もいないなんてめずらしい。

そう思いながら、リビングの電気をつけた。

食事の用意もしていなかった。ただ、テーブルの上に、無愛想にメモが残してあった。

おかあさんの字で、大学病院に来なさい、と書いてあった。いやな予感がした。

病院。

私はその場にかばんを放りだして、家をとびだした。今ならまだ、バスがある。走ればバス停まで十分とかからない。手にはサイフだけを、しっかりとにぎりしめていた。

受付のひとは親切で、声がでないことを手ぶりで伝えると、紙とペンをだしてくれた。名前を書くと、病室への行きかたを教えた。れた。

私はそのとおりに、できるだけ音をたてないように走った。
なにがあっただろう。

おとうさん、だろうか。それともおにいちゃん？

いやな考えばかりがふくらんでゆく。

息せききってドアを開けると、おにいちゃんがねむっているのが見えた。

管や線で機械につながれている、おにいちゃん。

やすらかにねむっているようなのに、どういうわけか、もう帰ってきてくれないような気がした。

「——きみは？」

白髪頭の白衣を着た男のひとが、私を見て片眉をはねあげた。

なにも持っていないかったから答えられないでいると、おとうさんが、

「娘です」

と言った。

「どこへ行っていたの！？ おまえがいない間に、智幸はっ……！」
母がヒステリックにわめく。母は髪もぼさぼさで化粧もしていなかった。

父は母をとめようとしめない。悲痛なおもちでうなだれている。私は白衣の男のひとに視線でたすけをもとめた。たぶん、この場でいちばん冷静だろうし、事情もわかつているだろうと思ったからだ。

「智幸さんは、登校途中に事故にあわれました。けがはそうでもなかったのですが、打ちところが悪く……」

男のひとは言葉をにこした。きっと、悪いことなのだろう。
私は先をうながした。おにいちゃんがどうなっているのか知りたかった。

「植物状態です」

——つまり、あれなのだろうか。よくドラマであるような、生きてはいるけれどももう起きあがることのない状態。

私は三人のおとなたちをうかがった。全員が全員、私の推測は正しいのだと証明するような、そんな顔をしている。

私はその場に座りこんだ。

おにいちゃんは、もう笑わない。

おにいちゃんは、もう泣かない。

おにいちゃんは、もうしゃべらない。

生きてはいるけれど、死んでいるのと同じなのだ。私の知らない間に、おにいちゃんはとくへ行ってしまった。

私はさけびたかった。わめきたかった。

それでどうにかなるわけではないのだと、知っているのに。

彼のことなんかどうでもよくなっていた。今、私の中でいちばん大きな位置をしめているのはおにいちゃんだった。

「声をかけてあげてください。聞こえていますから」

男のひとがなぐさめるように言った。

少しもなぐさめにはならなかった。

だって、私には声がないのだ。呼びかけてあげられるわけがないのだ。

もしも、私に声があったなら。

何千回でも、何万回でも、その名を呼んであげるのに。

私は床に手について、よろよろと立ちあがった。

手ぶりで、私とおにいちゃんをふたりだけにして、と訴える。

「なにを言ってるの……こんなときに、そのへんをフラフラしてい

たくせに！ 図々しいにもほどがあるわ。智幸になにをする気なの？」

まるで、悪魔を相手にしているようなののしりようだった。私はうなだれた。

なにも、こんなときにまで、悪しざまに言わなくてもいいのに。そこまで私が嫌いなんだろうか。

「友紀恵……。落ちつきなさい」

おとうさんがおかあさんをなだめる。あまり効果はないようだったけれど、私は少しだけ、感謝した。

私は心をこめて頭をさげた。ふかぶかと。

男のひとはうなずいて、おとうさんとふたりで、おかあさんを連れだした。

白いドアが、ぱたん、としまる。

とたんに部屋はしずかになった。機械の動く音だけがひくくひびいている。

私はコード類を踏まないようにして、おにいちゃんのベッドのそばへ行った。おにいちゃんの顔をのぞきこむ。

とてもきれいな顔だった。まるで、ねむっているみたいなの。

おにいちゃんは決してさめないねむりの中にいる。

こんなことになるのなら、もっとやさしくしてあげればよかった。逃げたりせずに、応えてあげればよかった。

今はもう、言っても詮ないことだけれど――

ごめんね。おにいちゃん。

きっと私は、おにいちゃんが好きだった。たぶん、とても好きだった。

いつも私は、よのなかに言葉がなかったら、と思っていたけれど、今は心から、言葉がほしいと思う。

もしも私に声があつたら、おにいちゃんに伝えられるから。

おにいちゃんが目をあけなくても、私の言葉はとどくでしょう？
どうして私は気づかなかつたんだろう。気づこうとしなかったん

だろう。

ごめんね。

ごめんね、おにいちゃん。

私はそつと、瞼をおろした。

そして、おにいちゃんのひたいに口づけた。

智幸——と。

心の中で、おにいちゃんの名前を呼びながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2832c/>

たえて言葉のなかりせば

2010年10月8日15時12分発行